

ニュースレター

No.38

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE

今後のキリスト教と文化研究所の活動

所長 法学部教授 大学宗教主任 村椿 真理

2015年度、キリスト教と文化研究所所長の任を、前任の渡部洋先生の後任として再び担うことになりました。渡部先生の良き働きを引き継ぎ、微力を捧げたいと祈念しています。

さて当研究所は、従来からの、ヘブライズム研究、キリスト教と日本の精神風土研究、奉仕ボランティア教育研究、依存症と環境神学研究、坂田祐研究、いのちを考える研究、バプテスト共同研究などの諸研究会に加えて、本年度新たにキリスト教聖書学の分野から、新約研究の研究会が立ち上げられて活動を開始しています。研究会以外には所報編集委員会、広報、資料委員会が活動し、本年度は10学部から13名の所員が集まり、学内研究員、学外の客員研究員合わせて、総勢57名の研究者が集い、研究活動を担うこととなりました。

大学改組に伴い、学部横断型の当研究所も様々な課題と取り組んできました。設立当初、各学部から3名の所員の参加がありましたが、学部増設により所員数を各学部の構成規模に合わせて再検討する課題も生じました。従来の研究会が継続する中、新たに就任された所員が、当研究所でどのような活動に携わることができるのかも改めて問われるようになりました。これまでは、新所員自ら新研究会を立ち上げるか、既に存在する研究会に参加するか、若しくは委員会活動に加わるかのいずれかを選択していただいたのですが、既存の研究会に自分の興味を覚える研究課題が見あたらない場合、初めて所員になった方々は、すぐには自身の研究グループを立ちあげることもできず、結局自分はどこに所属すればよいのか分からないという状況も見受けられました。当研究所が、これまで積み重ねてきた研究活動をさらに発展させ、より良い成果をあげることが意義あることなのですが、その一方で新所員の研究が提案しにくくなるような状況がもしもあるとするなら、これは再考すべき事柄です。科研費等を含む外部研究資金の獲得がなければ、与えられている活動費だけでこれだけの数の研究会活動を十分に行うことは事実上難しいからです。

そこで今後は研究所の活動全体について、再度しっかり議論してゆくことが求められていくと思われまます。

本研究所の与えられてきた使命は、キリスト教を伝統的教育理念に掲げる本学の、様々な学術研究を、キリスト教的立場から改めて深く省察し、諸学問のそれぞれの学的内部論理や理念の底に流れる共通なものを見出して、それぞれの学的成果を生かして真に現代社会に貢献し得るものとしていく「ファシリテーター」としての役割を担う処にあったのではないかと、わたし自身は考えてきました。現実には道半ばではありますが、一歩でも近づけるよう、諸活動を通して力を合わせて参る所存です。

「坂田研究」、「坂田日記研究」から学んだこと

本学名誉教授 帆苅猛

坂田祐の名は校訓「人になれ奉仕せよ」の言葉とともに学院の精神的支柱として歴史に刻まれている。本研究所の坂田祐研究グループは、坂田祐の生涯を辿ることによって学院の歴史と精神を明らかにしようとしてきた。坂田祐が遺した日記は、ご子息の坂田創先生（二〇一四年九月逝去）を中心に解読が進められ、本研究所報第3号〜12号に紹介されている。今回は坂田祐研究を巡る想いを中心に辿ることにする。

坂田は一八七八年（明治11）に旧会津藩士の家に生まれ、青年期は銅山労働者や陸軍軍人（日露戦争にも従軍）として過ごした。陸軍時代にキリスト教および本学院の第二の源流である東京学院（東京中学院から改称）を知り、陸軍免官後に東京学院中等科を卒業し、第一高等学校に入学した。翌年、内村鑑三の門下生となり、薫陶を得て信仰を深めた。東京帝国大学卒業後の一九一五年（大正4）に東京学院の教師となり、一九一九年（大正8）に私立中学関東学院の院長に就任してから、一九六八年（昭和43）に関東学院理事長を退任するまで、半世紀に亘って学院の中心的存在であり続けた。

1. 坂田の「人となり」について感じさせられたこと

私自身は、坂田祐ご本人との直接の出会いはい入学式で理事長として訓示を賜ったことと、関東学院大学神学部の時代に霞ヶ丘教会で毎週のように会堂の後ろの方からおそるおそるお顔を拝見したことぐらいであった。しかし、坂田日記を通して坂田の「人となり」についてもさまざま面に触れることができた。

まず感じさせられたのは、人への気遣い、細やかな配慮である。これは学生たちに対してもそうである。上にも少し触れたように、学生たちの意見にはよく耳を傾けている。そして、そしてそれを受け入れない場合でも、学生たちを説得しながら物事を進めている。とくに印象に残っている出来事は問題を起した学生の処分についてである。坂田としては何とか退学しないで済むように図りたかったが、教員会では退学にすべしとの意見が多く、それを受けて退学の処分を下さざるを得なかった、というものである。

もうひとつ坂田の日記の中で驚きを覚えたのは、トラブルが起った時の果敢な決断力である。組織の中では人事を巡ってしばしば問題が起こる。関東学院でも時折トラブルが生じている。そのようなとき、坂田を支持する形で動いた教員であっても、問題となる行動を起した時には説得しつつ果敢に処分を行っている。そして、教員たちに「聖書の言葉を基準にした」行いをするように訓示をしている。

2. 学院史に関する新たな発見

関東学院の第三の源流である「中学関東学院」は一九一九年に横浜の三春台に設立された。この設立の原点は、坂田が関わっていたバプテスタ青年同盟の発議、すなわち、東京には



坂田祐（学校法人関東学院学院資料室提供）

多くのミッションスクールが存在するが東京学院は土地が狭く発展の余地がないので横浜に移転すべきだとする見解にあることも明らかにされていた。そして、東京学院は中学関東学院と合同して財団法人関東学院が成立する。この合同に至る経緯は、まず、一九二四年12月27日の研究委員会（委員はホルトム、東京学院院长千葉勇五郎、植山寿一郎、グレセツト、坂田祐）で「東京学院は関東学院に合併すること」を決議したことに発している。しかし、合同は予定通りには進まないが、その経緯については必ずしも明確ではない。

坂田日記の中ではその経緯がいくつか具体的に示されている。一九二六年に坂田は渡部元氏、友井こずえ（楨）氏などと合同についての会談を経て、さらには、文部省と折衝しつつ、関東学院と東京学院の協同委員会・聯合理事会の何度かの議を経て決定されたことが具体的に示されている。その際、新たな校地・校舎をどうするか、千葉勇五郎氏の処遇についての扱いなどが課題となっていることも記されている。そうした経緯から見ると、坂田が主導する形で進め、合同に向けての合意形成でも大きな役割を果たした、と見るのが妥当なように思われる。これはまた坂田が青年会時代に描いた幻の流れに沿ったものだと考えられる。

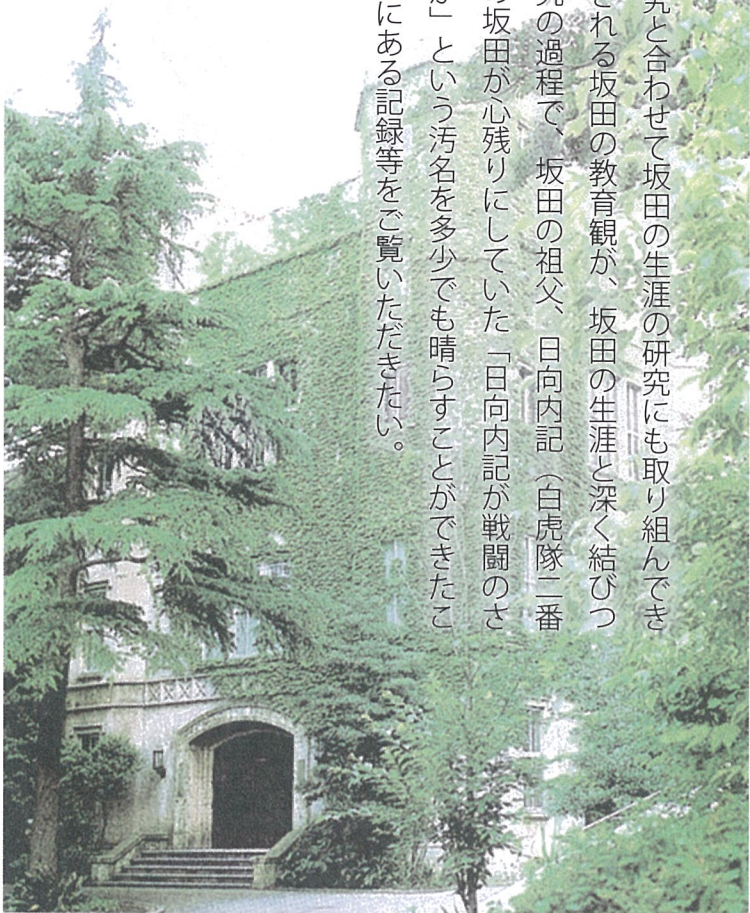
浦舟町にあった関東学院セツルメントについては、『関東学院百年史』の三六七ページでは一九三五年に社会事業部の廃止とともに閉鎖されたことが記されている。しかし、坂田日記によると、一九三七年1月13日にグレセツトの車で渡部一高とともにセツルメントを視察し、渡部と相談の上、3月限りで閉鎖することを決議している。そして、3月21日に渡部司式による閉館式を行っている。なお、4月に入ってから、セツルメントにかかわっていた学生が2名坂田を訪ねて、今後何らかの形で継続できないか話し合いをしている。それに対して坂田は、何らかの形で継続できれば、地代などの少額の補助であれば可能であることを伝えている。

また、平和主義者であったコベル宣教師の辞任については、学校運営・教育観をめぐって坂田と対立して関東学院を辞めざるをえなくなったという見方が多いように思われるが、坂田の日記の記録によると必ずしもそうではない。坂田は外部からの様々な干渉があったにもかかわらず、コベル宣教師が何とか関東学院で教員を続けられるよう尽力している。さらに、関東学院を辞任したのちに、日本に残って教育・宣教の働きができるよう働きかけている。また、コベル宣教師が横浜からフィリピンに向かう際には、学生たちも見送りに行かせたほか、坂田自身も見送りに出かけている。

その他、こまごまとした点でも学院史をめぐる新たな発見が数多くあったが、皆様方のご協力を得て確認しつつ、新たな学院史の作成に役立てていきたい。

3. 「坂田研究グループ」の活動の中から

「坂田研究グループ」では、坂田日記研究と合わせて坂田の生涯の研究にも取り組んできた。これは「人になれ奉仕せよ」に凝縮される坂田の教育観が、坂田の生涯と深く結びついていると思われるからである。その研究の過程で、坂田の祖父、日向内記（白虎隊二番隊長）が活躍した会津を訪れた。晩年の坂田が心残りになっていた「日向内記が戦闘のさなか、隊を離脱して逃亡したのではないか」という汚名を多少でも晴らすことができたことは幸いであった。詳しいことは、研究所にある記録等をご覧いただきたい。



旧中学本館（横浜市認定歴史建造物）

1929（昭和4）年に中学本館の献堂式が挙げて以来、2008年3月までの約80年間、三春台校地（横浜市南区三春台）において校舎として使用された。設計者はJ. H. モーガン（Morgan）。横浜大空襲に耐え、長い歴史を刻み、現存しているこの建物は、関東学院史資料の最たるものと言えるであろう。（本誌撮影）

バプテスト共同研究グループの活動

代表 村椿 真理

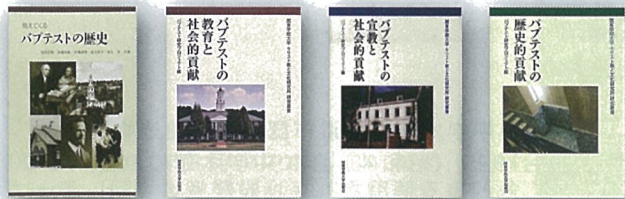
バプテスト共同研究グループは、本学のキリスト教の伝統であるバプテストの歴史、神学などに関する研究課題を持ち、それらがいかに近代世界形成に貢献し、また今なお重要な問題提起をなしているか。また現在わたしたちが抱えている諸問題に対してどれほど多くの良き解決のヒント・道しるべが、過去の歴史伝統のなかに隠されているかを明らかにする課題をもって活動を継続してきました。この研究グループは二〇〇四年に設置されましたが、二〇〇七年に研究叢書『バプテストの歴史的貢献』を大学出版会より出版した後、二〇〇九年に研究叢書第2号『バプテストの宣教と社会的貢献』を、二〇一一年には教科書『見えてくる バプテストの歴史』を出版し、その後は二〇一四年に再度研究叢書第3号として『バプテストの教育と社会的貢献』を出版してその研究成果を発表してきました。勿論、研究叢書掲載とはなりませんでしたが研究員各員が本研究所『所報』に掲載した諸論文、また個人的に出版を果たされた注目すべき研究書・単行本があることも添えなければなりません。

しかし振り返ってこの10年間、本学におけるバプテスト研究者の数は決して増えたわけではなく、研究会の今後の牽引力となって下さる後継者を僅かに見出すことができたような次第でありました。

関東学院はバプテストの伝統に拠って立つ大学であるとはしばしば言われるのですが、その場合一体何をもってバプテストの伝統というのか、その中身がいつも問題でした。バプテストと一言でいっても、そこには様々な神学的主義主張が存在してきたし、歴史的相違があったからなのです。ちなみに本学は旧北部アメリカ・バプテストの伝統に立つといわれますが、かつてのノーザン・バプテストも決して一枚岩だったのではないのであり、関東学院設立時に創設者として活躍されたミッシヨナリー達の神学的立場を先ずしっかりと把握しておかなければなりません。その上で、バプテスト教会が17世紀英国から育み主張し継承した多くの重要な神学的主張が正しく見てとられなければならないのです。これらを過去の遺物のように捉えるのではなく、独自の自己形成、未来形成の力の源とすべきでしょう。今後やはり是非とも取り組みたい課題は、バプテストの寛容論、人権論、民主主義論などであり、特にウォルター・ラウシェンブッシュが展開した「社会的福音運動」の再検証といった問題があります。本学が「奉仕」活動をその伝統的特色として今後とも展開しようとするならば、その神学的基礎をラウシェンブッシュの神学の中に再構築することなくしては成り立たないと思うからです。しかも本学には過去に軍国主義国家権力の下で、諸事情からやむなく「社会事業部」を閉鎖撤退してきたという苦い歴史的経験がありました。現在本学は未来ヴィジョンを掲げて新しい課題と取り組んでいます。過去の自己の経緯を知らずして未来を展望することはできません。そうした意味からも、本学におけるバプテスト研究は一層重要な意義を持つと思われれます。本研究グループに所属する研究員には、それぞれ専門分野があり、それは必ずしも一致しているわけではありません。しかし10年を経て、今後は何とかして真の意味での共同研究を実現させ、一層学的貢献をなすものでありたいと願っています。



バプテスト共同研究グループ研究会 (バプテスト共同研究グループ提供)



“God being with thee when we know it not.”

国際文化学部 英語文化学科・文学研究科 教授 安藤 潔

今年度、関係者からのご要望により所員となりました、国際文化学部英語文化学科(旧文学部英語英米文学科)の安藤潔です。信者ではありませんが若き日カトリック系大学に7年学び、3年教員として勤務しました。その後四半世紀以上非宗教の短大に勤めましたが、教育には精神的な支えが必要かと感じて、10年前に再びキリスト教主義の本学に転任してきました。

専門は英国のロマン派文学で、当然キリスト教の理解が必要な分野です。この小文の見出しに掲げた英文もワーズワスのソネット、"IT IS A BEAUTEOUS EVENING, CALM AND FREE" の締めくくりの一句です。キリスト教の価値観には共感できますが、この40年余り、信仰とするまでの転機はありませんでした。かといって家族宗教の仏教や神道を信じているともいえません。

所員としての分担は、「キリスト教と日本の精神風土」研究グループの取りまとめ役を仰せつかっています。定年まで後2年足らずで、この最後の2年間を所員として貢献できたら、またその先も研究員として残れたら幸いです。



キリスト教と文化研究所での活動に向けて

栄養学部 管理栄養学科 講師 中村 優

本年度より「キリスト教と文化研究所」の研究員として参加させていただくことになりました。栄養学部 管理栄養学科の中村優と申します。食品化学、食品加工学を専門分野として、食品の加工特性について研究しています。

現在、幅広い分野で国際化が進んでいますが、食品の分野においても「食のグローバル化」、「日本食および食品業界の海外進出」が加速しています。食のグローバル化は、時に「食の安全」を脅かすこともあり、また、国・地域によって、法律、習慣、宗教など、日本と異なることも多いため、それぞれの国の宗教や食文化を正しく理解する必要があると考えます。国は違っても「美味しい食事」、「楽しい食事」を求める心は同じであり、日本の食文化やMade in Japanを海外に発信する際に、宗教について考えることは重要です。「食」に携わる者として「キリスト教と文化研究所」の活動を通じ、宗教についての理解を深めていきたいと考えております。どうぞ、宜しくお願いいたします。



関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL : 045-786-7873 (研究所直通・月~金9:30~17:00)
FAX : 045-786-7806 (研究所直通・24時間受け付)
E-mail:kgyesus@kanto-gakuin.ac.jp

発行者：村椿 真理
Director: Makoto Muratsubaki